



— 総合馬術競技馬への飼料給与 —

今回は WEG における飼料供給レポートを参考に、馬場馬術、障害馬術ならびにエンデュランス競技馬の飼養管理に関する情報を紹介しました。今回は、総合馬術競技馬の飼養管理に関する情報や知見について紹介します。

・オーストラリアの例

オーストラリア総合馬術チームは、過去7回のオリンピックで金メダルを3回、銀と銅メダルをそれぞれ1回獲得している強豪です。馬場馬術や障害馬術チームを含め、オーストラリアのナショナルチームに所属する馬の栄養面を長年にわたってサポートしてきたエリザベス・オーウェン氏のレポートを見ると、個々の馬に対して決して画一的な飼養管理が取られている訳ではないことがわかります。各馬の個体差や嗜好性を最重視したバラエティに富んだ管理が施されていたなか、オーウェン氏が強調するのは以下の項目です。

- 1日の給与回数は2-4回が一般的だが、4回給与された馬の方が体重の変動が少なく消化障害の発生リスクを軽減できる
- 濃厚飼料の1回あたりの給与量は体重100kgあたり0.5kg以下とする
- カサ(升や体積)で与えるのではなく、牧草を含め重量で給与量を把握する
- 実際に給与されていたアルファルファ乾草のカルシウムや鉄含有率には3倍近くのバラツキがあり、ミネラルは牧草から供給されるとの過信は禁物である
- 各種配合飼料にラベル表示されている推奨給与量を盲目的に信用してはいけない
- 筋肉の正常性維持に必要なビタミンEは不足しやすく、1日あたり1,500IU 与えるべきである(強い運動が負荷されている馬の一般的な要求量は、体重500kgの馬で1,000IU、体重600kgの馬で1,200IU)
- 総合競技馬の胃潰瘍発生率は高く、その防止のため乾草は咀嚼による唾液分泌を促すような長い茎を含むものを選択する
- 良質過ぎるアルファルファ乾草はタンパク質が高く、体内の水分バランスを崩しやすい(過剰なタンパク質を排泄するために尿量が増加する)ので多量給与は避ける
- 穀類はスチーム処理されたものを給与し、脂肪の併用はエネルギー補給と持久力改善に有効である
- 食塩は最低でも1日50グラム与える
- 運動をしない日は濃厚飼料の給与量を減らす

・クロスカントリー競技前後の飼料給与

オーウェン氏によると、クロスカントリー競技が始まる4時間前以降に濃厚飼料を給与すべきではないとしています。他の総合競技馬に関する調査でも、時間はさまざま

だったものの競技開始前の数時間は飼料が制限されていたと報告されています。これは運動前の濃厚飼料摂取が、その後に上昇する血中のインスリンの作用により筋肉に貯蔵されているグリコーゲンの利用を妨げることや脂肪の利用率を低下させることを回避するためのものです。一方、少量(500グラム程度)の乾草あるいは切り草の競技前の給与は、どのようなタイミングであっても問題は少なく、前号記述のとおり、むしろ胃潰瘍防止の観点から推奨されています。

競技終了後は、消耗したエネルギーと栄養素の補給を目的として、なるべく早めに通常給与している総合的な飼料を給与します。とくに、脱水症状からの迅速な回復を目的とした水分と電解質補給に加え、筋肉グリコーゲンの効率的な再貯蔵を図るために炭水化物が豊富な穀類をこのタイミングで給与することが推奨されます。

・各種サプリメントの利用

上述の調査によると、総合競技馬には3-4種類のさまざまなサプリメントが利用されていたと報告されています。それによると、電解質系のサプリメントが79%の馬に、次いで関節保護や胃潰瘍予防を目的としたサプリメントがそれぞれ53%、50%の馬に投与され、他に筋肉の酸化低減や機能強化を目的としたビタミンEとセレンの混合サプリメント(20%)やハーブ(19%)、蹄質保護サプリメント(16%)が利用されていたとのことです。これらのうち、著者が利用に懐疑的であったものは関節保護サプリメントで、明らかな効果が科学的に未解明であることがその理由です。一方、サプリメントの利用がまったくなかった馬も全体の5%いたとのことでした。これは、不足しやすい各種の栄養素が配合されている飼料に対する信頼の証しであったとも考えられます。



図 世界馬術選手権大会(2018年9月)総合馬術競技で活躍した戸本一真選手(タコマ)のクロスカントリー競技風景(写真提供:日本馬術連盟)